季　　報

第 94 号

丹後海の釣延縄によるアカアマダイ漁業

釣延縄により水揚げされたアカアマダイ

平成 20 年 8 月

京都府立海洋センター

目　次

はじめに …… 1

1 アカアマダイの生態
(1) 年齢と成長 …… 2
(2) 成熟と産卵 …… 3
(3) 食性 …… 3

2 釣延縄によるアカアマダイ漁業の現状
(1) 漁獲量の経年変化 …… 4
(2) 漁獲されている魚の大きさ …… 4
(3) 銘柄ごとの漁獲状況 …… 5
(4) 年齢ごとの漁獲状況 …… 6
(5) 漁獲量が年により変動する理由 …… 7

3 釣延縄によるアカアマダイ漁業の評価
(1) 再生産に必要な親魚は残されているのか …… 9
(2) 漁獲量を増やすにはどうすれば良いのか …… 10
(3) シャリグジ再放流の効果 …… 11

おわりに ……13

はじめに

アカアマダイは、日本海側では青森県よりも南の海域、太平洋側では本州中部よりも南の海域、そして東シナ海、南シナ海に至るまでの広い範囲に分布し、底びき網、吾智網、釣延縄、漕ぎ刺網など様々な漁業で漁獲されます。京都府では、主に釣延縄により漁獲されています。府内の釣延縄漁業の水揚げ金額に占めるアカアマダイの割合は近年約 20～34%であり、本種は当該漁業にとって極めて重要な資源であるといえます。また、アカアマダイは京都では「グジ」と称され、とくに若狭湾で水揚げされたものは高級食材として利用されています。

海洋センターでのアカアマダイの研究は、昭和 50 年代に主に成熟、成長および分布などの資源生態調査や種苗生産に関する基礎研究が精力的に行われました。近年では、（独）水産総合研究センター宮津栽培漁業センターでアカアマダイの種苗生産技術が確立されつつあることから、京都府海域において放流技術開発に関する調査を中心に、水揚げ市場での魚体測定や成長、成熟などの調査を行ってきました。

一方、釣延縄の漁業者の方からは、「ある程度の大きさのアマダイは毎年釣れるが、シャリグジ（小型魚）は釣れたり、釣れなかったりする」「以前のようにシャリグジが釣れなくなった」などといった話を聞くことがあります。これらのことは、何を意味しているのでしょうか？

本冊子では、これまでの調査で明らかとなったアカアマダイの生態の一部を整理し、漁獲量の推移や漁獲されている魚体の大きさなどの情報をもとに、漁業者の皆さんの疑問について考えてみたいと思います。また、近年の釣延縄によるアカアマダイ漁業が、資源を持続的に利用すること、かつ経済的にも有効利用することを考えたときに、適正に行われているのかどうかを検討してみたいと思います。